

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2013/08/01

夏季休暇シーズン入りで決定打に欠ける

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	➡	他力本願型の展開 予想レンジ: 128.50~133.50円	2-3
ユーロ/ドル	➡	上値余地は小さそうだが・・・ 予想レンジ: 1.2850~1.3450ドル	4-5
ポンド/円	➡	BOEのフォワードガイダンスの行方は？ 予想レンジ: 144.10 ~ 154.00 円	6-7
ポンド/ドル	➡	英米の金融政策スタンスを探る 予想レンジ: 1.4800 ~ 1.5500 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



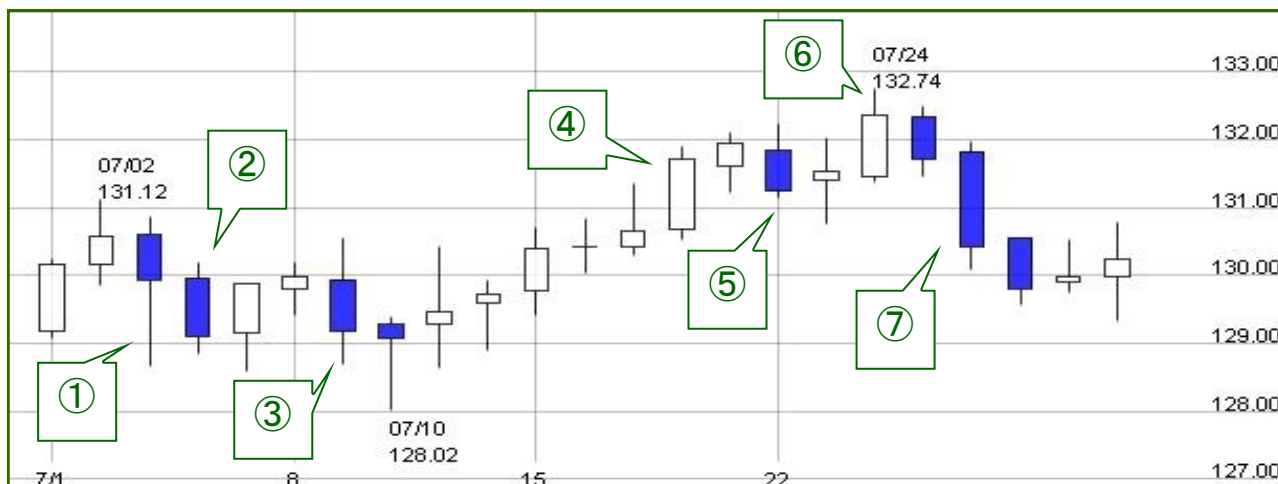
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

EUR/JPY

ユーロ/円 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	129.17円	132.74円	128.02円	130.25円



①	3日、前々日、前日とポルトガル連立与党の閣僚が相次いで辞任した事を受けて、欧州市場で同国債利回りが上昇した。同国の債務懸念が再燃する形でユーロ売りが活発化すると128.65円まで急落。ただ、NY市場に入ると、安く始まったNYダウが切り返した事を受けて130円台まで反発した。
②	4日、欧州中銀（ECB）は政策金利の据え置き（0.50%）を決定。その後、ドラギ総裁が会見で「金利は『長期にわたり』現行水準かそれを下回る水準になる」と発言し、ECBとしては前例のない「フォワードガイダンス（金融政策に関する指針）」を示した。これを受けてユーロ売りが強まると、128.83円まで下落したが、欧州株が「フォワードガイダンス」を好感して上昇したため下げ渋った。
③	9日、日経平均株価の上昇を背景に一時130.56円まで上昇したが、アスムッセンECB理事が「追加の長期資金供給オペ（LTRO）の可能性を排除しない」「ECBのフォワードガイダンスは1年を超える」などと発言すると129円台前半まで下落。さらに、格付け会社S&Pがイタリアの格付けを「BBB」に引下げた事を受けて128.70円まで続落した。
④	18日、前日に行われた米連邦準備制度理事会（FRB）のバーナンキ議長による議会証言が総じてハト派的であった事を好感して欧米株価が堅調に推移。NYダウ平均が史上最高値（当時）となる15580ドル台に上昇した他、ポルトガル議会で連立政権の不信任案が否決された事を好感して131.88円まで上昇した。
⑤	22日、前日に投開票が行われた本邦参議院選挙にて、安倍首相率いる自民党が圧勝。自民・公明両党で参院の過半数議席を獲得し、衆参のねじれが解消される事になった。「アベノミクス」推進による円安・株高期待が高まり、東京市場オープン前から円売りが強まるとオープン直後に132.23円まで上昇したが、選挙結果が事前予想通りであった事から、日経平均が伸び悩むと同時に円を買い戻す動きに転じ、131.13円まで急落する乱高下となった。
⑥	24日、豪第2四半期消費者物価指数の伸びが鈍化した事を受けてユーロ/豪ドルでユーロ高に振れた他、独7月製造業PMIが50.3、ユーロ圏7月製造業PMIが50.1といずれも予想（49.2、49.1）を上回った事を受けて132.74円の高値を付けた。
⑦	26日、企業決算への期待が薄れる中、日経平均が下落基調を強めた上に、欧米でも株安が進行。リスク回避の円買いが強まると130.08円まで下落。米FRBが「フォワードガイダンス」を修正して低金利政策の時間軸を強化するとの思惑からNYダウ平均は引けにかけて持ち直したものの、ユーロ/円の戻りは鈍かった。

EUR/JPY

今月のポイント

7月のユーロ/円相場は128.02円～132.74円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約0.8%の小幅な上昇(ユーロ高・円安)となった。ポルトガルの政局不安や欧州中銀(ECB)によるフォワードガイダンス導入などに加え、本邦参院選後に広がった材料出尽くし感など、ユーロ/円の下押し材料があったにもかかわらず、24日には約2カ月ぶりとなる132.74円の高値を付けるなど堅調に推移した。その背景として、ユーロ/ドルやユーロ/豪ドルの上昇によるところが大きかった。米国の量的緩和縮小とそれに続く早期引き締め観測の修正が進みドル安に振れた事や、中国の景気減速や追加利下げ観測を背景に豪ドル安が進んだ事が相対的にユーロを押し上げる事になった。もっとも、いわば他力本願型の上昇であったため、値幅についても上昇率についてもユーロ/円としては比較的小ぶりだったと言えるだろう。

8月についても、ユーロと円の双方に決定的な要因が浮上する事は考えにくく、他力本願型の相場が続く公算だ。したがって、ドル/円やユーロ/ドル、あるいはユーロ/豪ドルなど、他の通貨ペアの動きを気にしておく必要があるだろう。また、主要国の株価動向もユーロ/円の値動きに影響を与える可能性がある。株高はユーロ高・円安に作用しやすく、株安はユーロ安・円高要因となりやすい。もっとも、8月は多くの投資家が夏季休暇に入るため、為替にも株価にも明確な方向感はいにくいだろう。(神田)

(予想レンジ: 128.50円～133.50円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

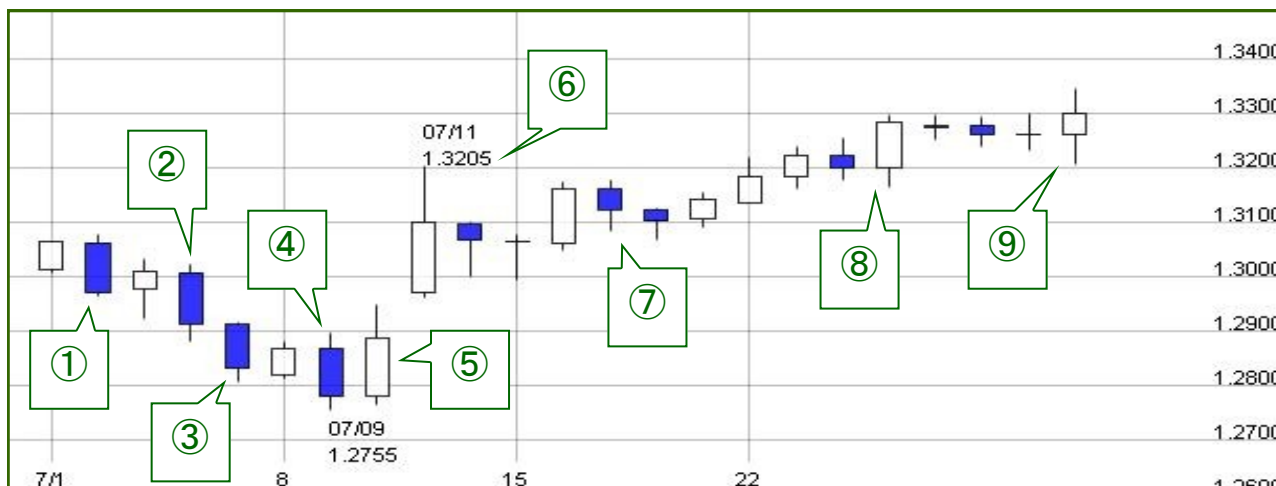
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(木)	7月中国製造業PMI	8/14(水)	第2四半期独・ユーロ圏GDP速報値
	欧州中銀金融政策発表	8/16(金)	6月ユーロ圏貿易収支
8/2(金)	7月米雇用統計	8/19(月)	7月本邦通関ベース貿易収支
8/5(月)	6月ユーロ圏小売売上高	8/20(火)	7月独生産者物価指数
8/7(水)	6月独鉱工業生産	8/22(木)	8月独・ユーロ圏PMI製造業・速報
8/8(木)	7月中国貿易収支	8/23(金)	8月ユーロ圏消費者信頼感・速報
	6月本邦経常収支・貿易収支	未定	8月独IFO景況指数
	日銀金融政策決定会合(7日～)	8/29(木)	8月独雇用統計
8/9(金)	7月中国鉱工業生産	8/30(金)	7月本邦全国消費者物価指数
8/12(月)	4-6月期本邦GDP・一時速報		7月ユーロ圏失業率
8/13(火)	6月ユーロ圏鉱工業生産		8月ユーロ圏消費者物価指数・速報
	8月独・ユーロ圏ZEW景況感調査		
	7月米小売売上高		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

ユーロ/ドル 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.3012ドル	1.3345ドル	1.2755ドル	1.330ドル



- ① 2日、ポルトガルで前日の財務相に続き、外相が辞任を表明(緊縮策への国民の不支持を理由に)すると、同国の債務懸念が再燃する形で国債利回りが上昇。これを嫌気してユーロ売りが活発化した。
- ② 4日、欧州中銀(ECB)は政策金利の据え置き(0.50%)を決定。その後、ドラギ総裁が会見で「金利は『長期にわたり』現行水準かそれを下回る水準になる」などと発言。ECBとしては前例のない「フォワードガイダンス(金融政策に関する指針)」を示した事を受けて1.2882ドルまで下落した。
- ③ 5日、米6月雇用統計で失業率こそ7.6%と予想(7.5%)を上回ったものの、非農業部門雇用者数が19.5万人増と予想(16.5万人増)を上回るとドル高が進行し、1.2806ドルまで下落した。
- ④ 9日、アスムッセンECB理事が「追加の長期資金供給オペ(LTRO)の可能性を排除しない」「ECBのフォワードガイダンスは1年を超える」などと発言すると1.28ドルを割り込んで下落。さらに、格付け会社S&Pがイタリアの格付けを「BBB」に引下げた事を受けて1.2755ドルまで続落した。
- ⑤ 10日、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録にて「多くのメンバーは量的緩和縮小には労働市場の改善が必要と判断した」「資産買い入れ終了後の引き続きかなりの間、現在の極めて低いFF金利が正当化される公算と予想」などの見解が示されるとドル売り(ユーロ買い)が活発化した。
- ⑥ 11日、前日のNY市場終了後に米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が「インフレ率と失業率は一段の刺激策の必要性を示唆している」と発言した事を受けて、オープン直後にドル売りが強まるとチャート上に「マド」を開けて1.3205ドルまで急騰した。
- ⑦ 17日、米FRBのバーナンキ議長が半期に一度の議会証言に臨むにあたり、「債券購入ペースは事前に決まっていない、高度に緩和的な政策を予見可能な将来において維持」などとする原稿を公表するとドル売りが強まり1.3178ドルまで上昇。しかし、実際に証言が始まるとドルを買い戻す動きが強まり1.3083ドルまで急落するなど乱高下した。
- ⑧ 25日、米ウォールストリート・ジャーナル(WSJ)紙が「FRBは、低金利を長期にわたり維持する姿勢を示すため『フォワードガイダンス』の変更を議論する可能性がある」と報じた事をきっかけにドル売りが活発化。ユーロ/ドルは1.3296ドルまで上昇した。
- ⑨ 31日、米7月ADP全国雇用者数が20.0万人増(予想18.0万人増)、米第2四半期国内総生産(GDP)速報値が前期比年率+1.7%(予想+1.0%)と、経済指標の好結果が続くとドル買いが優勢となり1.3206ドルまで下落した。しかし、米FOMC声明で、「フォワードガイダンス」の変更こそなかったものの、「インフレ率が目標の2%を継続的に下回っており、長期化はリスクとなる可能性」としてディスインフレへの警戒感をにじませた事から急速にドル売りへと転換し1.3345ドルの高値を付けた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

今月のポイント

7月のユーロ/ドル相場は1.2755～1.3345ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースでは約2.2%の上昇（ユーロ高・ドル安）となった。上旬は、強い米雇用統計を受けたドル買いに加え、ポルトガルの政局不安や欧州中銀（ECB）の緩和姿勢強化というユーロ売り材料が重なり、約3カ月ぶりの安値を示現。ところが、中旬以降は、米連邦準備制度理事会（FRB）のバーナンキ議長が、年内の量的緩和縮小に含みを持たせつつも、早期の引き締め期待をけん制するとドル安（ユーロ高）に振れた。また、24日に発表された独・仏の7月PMIが揃って改善するなどユーロ圏の景況感悪化に歯止めがかかった事や、対豪ドルでユーロ高が進行した事もユーロ/ドルの上昇につながった。さらに、31日には米連邦公開市場委員会（FOMC）のハト派的な声明を受けて6月18日以来となる1.3345ドルまで反発した。

8月については、ECB理事会が1日に開催されるが、7月に「フォワードガイダンス」を導入した直後であり、政策変更は考えにくい。さらに、米FOMCは会合そのものの予定がなく、欧・米の金融政策と言う点ではやや決め手に欠ける。ユーロ/ドル相場は、それぞれの景気指標に一喜一憂する可能性はあるが、夏季休暇シーズンが本格化する事もあって明確な方向感を伴った動きにはならないだろう。ただ、ここ数ヶ月の大まかなレンジが1.2750-1.3400ドルである事を踏まえると、足元の1.3300ドル前後という水準は上限に近く、上値余地はそれほど大きくないと考えられる。（神田）

（予想レンジ1.2850ドル～1.3450ドル）

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

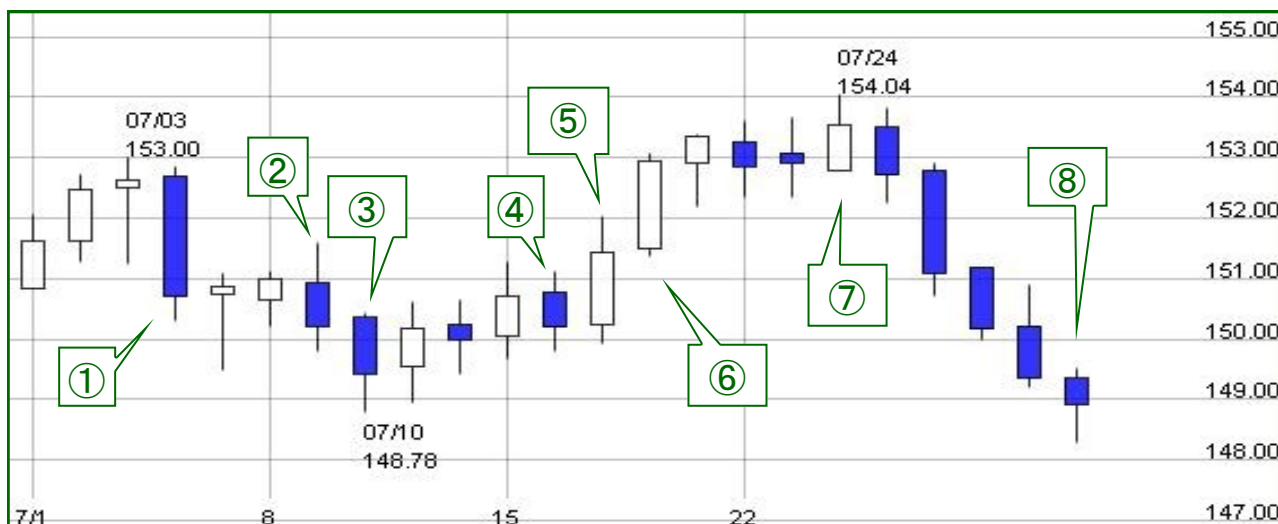
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(木)	7月中国製造業PMI	8/15(木)	7月米鉱工業生産
	欧州中銀金融政策発表	8/16(金)	6月ユーロ圏貿易収支
	7月米ISM製造業景況指数		7月米住宅着工件数
8/2(金)	7月米雇用統計		8月米ミシガン大消費者信頼感指数・速報値
8/5(月)	6月ユーロ圏小売売上高	8/20(火)	7月独生産者物価指数
	7月米ISM非製造業景況指数	8/21(水)	FOMC議事録(7/30-7/31分)
8/6(火)	6月米貿易収支	8/22(木)	8月独・ユーロ圏PMI製造業・速報
8/7(水)	6月独鉱工業生産	8/23(金)	8月ユーロ圏消費者信頼感・速報
8/8(木)	7月中国貿易収支	未定	8月独IFO景況指数
8/9(金)	7月中国鉱工業生産	8/27(火)	8月米消費者信頼感指数
8/13(火)	6月ユーロ圏鉱工業生産	8/29(木)	8月独雇用統計
	8月独・ユーロ圏ZEW景況感調査		第2四半期米GDP・改定値
	7月米小売売上高	8/30(金)	7月ユーロ圏失業率
8/14(水)	第2四半期独・ユーロ圏GDP速報値		8月ユーロ圏消費者物価指数・速報

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

ポンド/円 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	150.84円	154.04円	148.29円	148.92円



- ① 4日、英中銀(BOE)は金融政策据え置きを発表。しかし、異例に声明を発表し、緩和の可能性を残した上、オズボーン財務相がMPCへ書簡で、基準値の採用などを含む何らかの形のフォワードガイダンスを採用し8月のインフレ報告と共に提出するよう求めた。これにより緩和期待が高まり、ポンドは急落した。
- ② 9日、日経平均の上昇などを背景にポンド/円も上昇。欧州市場では151.60円まで値を伸ばした。しかし、英5月鉱工業生産が前月比±0.0%と予想(+0.2%)を下回るとポンドは失速。さらに欧州中銀(ECB)のアスムッセン理事が「追加の長期資金供給オペ(LTRO)の可能性を排除しない」「ECBのフォワードガイダンスは1年を超える」等と発言した事を受け、ユーロ/円が失速すると、ポンド/円は149.79円まで連れ安した。
- ③ 10日、日経平均など株安を背景にドル/円がストップロスを変えながら下落すると、ポンド/円も148.78円まで連れ安した。
- ④ 16日、小高く始まった欧州株が下げに転じた上、英6月消費者物価指数が前月比-0.2%と市場予想(-0.1%)を下回ったことを受けて失速。149.81円まで値を下げた。その後、一旦戻りもあったが、フィッシャーBOE理事が「BOEは出口戦略以上に一段の刺激策について議論するなど、量的緩和に関して全て検討した」などと発言したことを受けて再びポンドは反落した。
- ⑤ 17日、英6月雇用統計において失業率は4.4%(予想:4.5%)、失業保険申請件数推移は2.12万件減(同:8000件減)と予想よりも大幅に良好な結果だったことに加え、同時発表のBOE議事録において、カーニー新総裁のみならず前月まで資産購入枠拡大を主張していた2人のメンバーも金融政策据え置きに投票していたことが明らかになると、ポンドは急騰。152.04円まで上昇した。
- ⑥ 18日、英6月小売売上高、前月比(除く自動車燃料)は+0.2%と予想通りだった。ただ前年比は+2.1%と予想(+1.6%)を上回り、ポンドは上昇。さらに、米7月フィラデルフィア連銀景況指数が19.8と予想(8.0)を上回り、NYダウ平均株価が史上最高値を更新したことも追い風となった。
- ⑦ 24日、仏・独・ユーロ圏の7月製造業PMI・速報が相次いで市場予想を上回った事から、ユーロ/円が上昇すると、ポンド/円も上昇した。
- ⑧ 31日、欧州勢が円買いで参入し、全般的に円高が進むと、ポンド/円は148.29円まで値を下げた。その後、切り返したものの149円台前半では伸び悩み。FOMC声明を受けてドル/円がNY市場の引けにかけて軟化すると、ポンド/円も上値を切り下げた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP / JPY

今月のポイント

7月のポンド/円相場は148.29円～154.04円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.3%の下落(ポンド安・円高)となった。

7月のポンド/円は、全体的にはユーロ/円の影響を受けることが多かったが、独自材料でも良く動いた。まず、英中銀(BOE)の総裁にカーニー氏が就任したことで、金融政策の方向性にどんな変化が起こるのか、という点が特に注目された。金融政策委員会(MPC)後の異例の声明発表や、議事録において、前月まで資産購入枠の拡大を主張していた2人のMPCメンバーがカーニー新総裁と同様に政策据え置きに投票するなどのサプライズも効いていた。異例の声明発表で8月以降の追加緩和の可能性が市場に意識された点は大きかったと言えそうだ。

8月のポンド/円相場については、7日発表のインフレレポートが注目される。BOEは、この際に金融政策の「フォワードガイダンス」を発表する見通しだ。BOEのスタンスが追加緩和を見ているか、しばらく金融政策据え置き方向で見ているかによって、ポンドの方向感が変わってくるだろう。英国については最近、経済指標に堅調な結果が目立ってきており、一旦は目先の緩和期待が萎んでしまう可能性も低いとはいえない。

ただ、ドルの動向には要注意だ。8月は引き続き、「9月の米量的緩和縮小開始の可能性」が最も注目度の高いトピックになると考えられる。各種米経済指標を受けてドル/円やポンド/ドルが大きく動けば、ポンド/円も乱高下する可能性がある。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 144.10～154.00円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

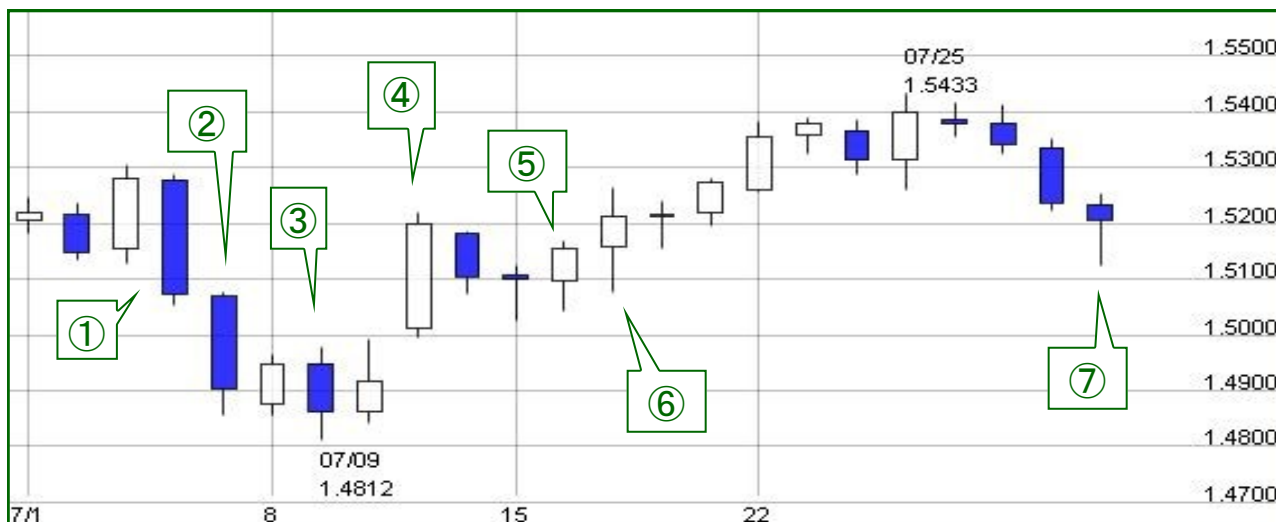
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(木)	7月英PMI製造業		6月日機械受注
	BOE政策金利発表		7月英消費者物価指数
	7月米ISM製造業景況指数		7月米小売売上高
8/2(金)	7月英PMI建設業	8/14(水)	BOE議事録
	7月米雇用統計	8/15(木)	8月米フィラデルフィア連銀景況指数
8/5(月)	7月英PMIサービス業	8/19(月)	7月日通関ベース貿易収支
	7月米ISM非製造業景況指数	8/21(水)	FOMC議事録(7月30日・31日分)
8/7(水)	BOE四半期インフレレポート	8/23(金)	第2四半期英GDP・改定値
8/8(木)	6月日経常収支・貿易収支	8/26(月)	7月米耐久財受注
	日銀金融政策決定会合(7日～発表)	8/27(火)	8月米リッチモンド連銀製造業指数
8/9(金)	6月英商品貿易収支		8月米消費者信頼感指数
8/12(月)	日第2四半期GDP・一時速報	8/30(金)	7月日全国消費者物価指数
8/13(火)	日銀金融政策決定会合議事要旨 (7月10日・11日分)		8月米シカゴ購買部協会景気指数

各項目の付記事項を必ずお読みのください。

GBP/USD

ポンド/ドル 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.5205ドル	1.5433ドル	1.4812ドル	1.5207ドル



- ① 4日、英金融政策委員会(MPC)は金融政策据え置いた。しかし、異例に声明を発表し、緩和の可能性を残した上、オズボーン財務相がMPCへ書簡で、基準値の採用などを含む何らかの形のフォワードガイダンスを採用し8月のインフレ報告と共に提出するよう求めた。これを受け、ポンドは急落した。
- ② 5日、米6月雇用統計は失業率が7.6%と予想(7.5%)より弱かったが、労働参加率が改善しており、非農業部門雇用者数が19.5万人増と予想(16.5万人増)を大幅に上回ったことで、1.4855ドルまでドル高となった。
- ③ 9日、欧州市場序盤に1.4979ドルまで一時上昇したが、英5月鉱工業生産が前月比±0.0%と予想(+0.2%)を下回るとポンドは失速。さらに欧州中銀(ECB)のアスムッセン理事が「追加の長期資金供給オペ(LTRO)の可能性を排除しない」「ECBのフォワードガイダンスは1年を超える」等と発言した事を受け、ユーロ/ドルが下げると、ポンド/ドルは1.4812ドルまで連れ安した。
- ④ 11日、前日の取引終了後、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が「インフレと雇用は一段の刺激策の必要性を示唆している」等と発言。量的緩和縮小の早期開始をけん制する内容が伝わると、ドルが急落し、ポンド/ドルは一時1.5192ドルまで上昇した。
- ⑤ 16日、英6月消費者物価指数が前月比-0.2%と市場予想(-0.1%)を下回ったこと等を受けて1.5043ドルまで下落。フィッシャー英中銀理事が「英中銀は出口戦略以上に一段の刺激策について議論するなど、量的緩和に関して全て検討した」と発言したこともポンドの重石となった。ただし、その後全般的にドル売り優勢になると1.5167ドルまで上昇した。
- ⑥ 17日、英6月雇用統計において失業率は4.4%(予想:4.5%)、失業保険申請件数推移は2.12件減(同:8000件減)と予想よりも大幅に良好な結果だったことに加え、同時発表のBOE議事録において、カーニー新総裁のみならず前月まで資産購入枠拡大を主張していた2人のメンバーも金融政策据え置きに投票していたことが明らかになると、ポンドは急騰。さらに、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長の議会証言前にドル売りが強まり、1.5265ドルまで上昇した。しかし、同議長の議会証言原稿が市場予想よりもハト派寄りだと判断されると、ドル高に転換した。
- ⑦ 31日、米7月ADP全国雇用者数が20.0万人増、米第2四半期国内総生産(GDP)・速報値は前期比年率+1.7%と、いずれも予想(18.0万人増、+1.0%)より強い結果となったことを受けてドル高が進むと、ポンド/ドルは1.5124ドルまで下げた。ただ、その後は米連邦公開市場委員会(FOMC)声明を前に下げ幅を圧縮した。なお、FOMC声明では「インフレ率が長期にわたり目標の2%を下回れば経済にリスクとなり得る」などとディスインフレ懸念を示す等ハト派寄りの内容で、ポンド/ドルは乱高下した後買い優勢となった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP / USD

今月のポイント

7月のポンド/ドル相場は1.4812ドル～1.5433ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースではほぼ横ばいとなった。7月のポンド/ドル相場は、全般的にドル主導で動いた。月初は米雇用統計の良好な結果から米量的緩和の早期縮小期待が高まり、全般的にドル高が進む中、ポンド/ドルは下落。英中銀(BOE)の金融政策委員会(MPC)後に出された異例の声明から、同国の追加緩和期待が高まった面もポンド/ドルの下げを後押しした。しかし、11日のバーナンキFRB議長の講演を受けて米量的緩和の早期縮小について高まり過ぎた期待が沈静化すると、ポンド/ドルは上昇。MPC議事録で、これまで追加緩和に投票していたメンバーが政策据え置き派に転じた点や、英雇用統計の好結果によって、目先のBOEの追加利下げ観測が後退した面もポンド高を押し進める要因になった。

8月のポンド/ドル相場については、米英、双方の金融政策の今後についての思惑が交錯する中での取引となるだろう。米国については引き続き、「9月の米量的緩和縮小開始の可能性」が最も注目度の高いトピックになると考えられる。各経済指標を受けて、9月開始の可能性およびその縮小ペース等についての思惑を固めて行く流れになるだろう。一方、英国については、BOEが7日に発表するインフレレポートや、その際に発表されると見られているBOEのフォワードガイダンスが焦点となる。この際、BOEのスタンスが追加緩和を見ているか、しばらく金融政策据え置き方向で見ているかによって、ポンドの方向感が変わってくるだろう。英国については最近、経済指標に堅調な結果が目立ってきており、一旦は目先の緩和期待が萎んでしまう可能性も低いとはいえない。こうした両国の金融政策の思惑に加え、8月は多くの市場参加者が夏季休暇入りし、相場が薄くなりがちだ。そうした中でまとまった規模の売買があれば、急激かつ大きな動きになる可能性もあるため、取引をする際はリスク管理に対して普段以上に気を配りたいところだ。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 1.4800～1.5500ドル)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(木)	7月英PMI製造業		7月米消費者物価指数
	BOE政策金利発表		7月米鉱工業生産
	7月米ISM製造業景況指数		8月米フィラデルフィア連銀景況指数
8/2(金)	7月英PMI建設業	8/21(水)	FOMC議事録(7月30日・31日分)
	7月米雇用統計	8/23(金)	第2四半期英GDP・改定値
8/5(月)	7月英PMIサービス業	8/26(月)	7月米耐久財受注
	7月米ISM非製造業景況指数	8/27(火)	8月米リッチモンド連銀製造業指数
8/7(水)	BOE四半期インフレレポート		8月米消費者信頼感指数
8/9(金)	6月英商品貿易収支	8/29(木)	第2四半期米GDP・改定値
8/13(火)	7月英消費者物価指数	8/30(金)	8月米シカゴ購買部協会景気指数
	7月米小売売上高		
8/14(水)	BOE議事録		
8/15(木)	8月米ニューヨーク連銀製造業景気指数		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。